様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年 １０ 月 ２６ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２４９３

研究課題名（和文）帝国日本における学校儀礼教育の歴史:声・音の検討を中心に

研究課題名（英文）History of discipline in Imperial Japan's school rituals; Reconsideration of voices and sounds

研究代表者
樋浦　郷子（HIURA, SATOKO）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：３０６３１８８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず植民地・日本内地を問わず学校日誌や沿革誌など、学校保存書類にあらわれる学校儀式や行事の実態に迫った。『学校沿革誌』によって、近代学校の有した普遍的特質と、地域事情に根差した特有さとを、並行して把握することを目指した。例えば「運動会」という日本に特有の行事の歴史を紐解き、男女に期待されていることに顕著な差がみられる点や,1945年以降の台湾や朝鮮半島での学校文書書記文化の継続性、琉球以来の会所による漢籍教育と、学校教育との間で起こる相克の一端などを明らかにした。後半では次の課題への足掛かりとして、植民地や日本内地の「辺境」における唱歌と万歳に着目して調査を開始した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義として、本研究のテーマである「音・声」を研究する上でも、あらためて学校や教育行政機関や地域文書館、図書館にばらばらに所蔵されている学校文書（周年記念誌を含む）の重要さについて、多少とも論及することができた点を挙げたい。この点と関連する社会的意義として、市町村合併によって、数多くの文書類が廃棄されたり、市町村史の編纂予算が削減対象となる事態が進んでいるなかで、「歴史総合」の導入や、脱植民地化など世界的規模で事物を検討する必要性の高まりもあいまって、国内だけでなく各地の各機関で文書保存を行うことの意義に、論考や発表を通じて迫ることができた。

研究成果の概要（英文）：I approached the historical reality in Imperial Japan’s school ceremonies and school events in archives such as school diaries and historical records through this project. For example, by unraveling the history of the “UNDOUKAI(sports day in Japan’s schools)”, school events have been understood as those that had unique historical scheme. There appeared to have been a big difference in what was expected to boys and to girls in school events under the imperial system. Also, Japan’s rule had brought school cultur in Taiwan and Korea and the system was seen to be continued without any intentions after their liberation in 1945. Thanks to this project, I clarified part of the continuity before and after colonization. Also I could launch the research about Shoka (school songs in ceremonies)in the colonies and the frontiers such as Okinawa in Japan.

研究分野：教育学

キーワード：教育史　朝鮮史　台湾史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、日本の旧植民地である朝鮮半島や台湾をフィールドとし、その教育実態について学校儀式および学校生活における拝礼などの儀礼にかかわる研究を進め、とくに植民地期朝鮮を中心に「御真影」と教育勅語の「奉護」設備としての神宮大麻奉斎殿や、校内神社にかかわる調査、研究を行ってきた。とくに「内地」との差異やあつれきを、「御真影下賜」の体系を可視化することを通じて一定程度明らかにした。これらを通じ、儀礼における「声」「音」という不可視の「力」のさらなる解明が、植民地教育史研究および植民地研究の深化に必要ではないかと考えるに至った。「声」の例として、儀式時の校歌斉唱や「沈黙」、「皇国臣民の誓詞」斉誦や「御製」の誦唱、スポーツ大会の宣誓等、「音」の例として、ラジオ体操の音や号令、笛やラッパ、時鐘を想定し、いずれも見えない現象であるからこその実証が求められると考えた。

２．研究の目的

本研究は、「声」「音」をともなう学校儀式および儀礼（「御真影」奉護設備への拝礼等）に込められる意図、それを実践される構造や持った機能について、帝国日本というひろがりの中で生起したであろう多様な「バリエーション」をつぶさに取り出し、その機能を検討し、当該社会において持たされた機能・意味を考察することで、新たな視角で植民地教育史、帝国日本の歴史に迫ろうとした。

３．研究の方法

上記で想定した研究を進めつつ、「声」として儀式唱歌や「万歳」の役割が教育史における未確定であることに気づかされた。そのため儀式唱歌の成立過程にも着目し、文書資料を丁寧に読み進めた。

2019 年度は、学校儀式・儀礼を含むものとしての運動会などの歴史を視野に入れた研究を実施した。植民地・日本内地を問わず学校日誌や沿革誌など、学校保存書類にあらわれる学校儀式や運動会の様態に迫った。『学校沿革誌』によって、近代学校の有した普遍的特質と、地域事情に根差した特有さとを、並行して把握することを目指した。「運動会」という日本に特有の行事の歴史を紐解き、男女に期待されていることに顕著な差がみられることなどに迫った。

2020 年度は、感染症拡大という状況のもとでも入手可能な韓国や台湾などの学校文書のうち植民地期のものを読んだ。この作業で、資料の翻刻や研究ノートの形で投稿準備の最終段階まで進展させることができた。このように厳しい状況のもとでも、入手可能な資料の読み込みをもとに 2 度のオンライン発表が可能になった。これらでは、学校文書形式の 1945 年以降の台湾や朝鮮半島での学校文書書記文化の継続性のほか、琉球以来の会所による漢籍教育と、学校教育との間で起こる相克の事態に多少なりとも迫ることができた。

2021 年度も、引く続き入手可能な学校文書や新聞記事のうち植民地期のものを読み，オンライン学会発表を複数回実施した。それらでは「身体髪膚」にこだわってアプローチを試みた。具体的には、思想の導入にともなう入浴習慣の事例を紹介し，非支配層からも断髪や日本式 入浴の導入を受容する人びとが現れること，それは男性から始まること，日本ではなく「文明」への捷径とみなされたことを報告した。さらに「学校文化」として現代も当たり前のように行われる「誓い」の一つとして「皇国臣民の誓詞」も存在した可能性を指摘した。

コロナ禍のために 1 年延長した 2022 年度は、課題である「声・音」にこだわり、唱歌と万歳に着目して調査研究のうえ各所で報告することができた。それらを通じて、ようやく「声・音」という課題の輪郭が見えてきたところで、引き続く数多い課題は次回 23K02074（非就学者層に着目してえがく植民地朝鮮の教育史）科研研究を中心に研究を継続したい。

４．研究成果

■2019 年度

（１）（口頭発表）「帝国日本 の『学校沿革誌』―学校の儀礼に着目して― 」日本台湾学会第 21 回学術大会 2019 年 6 月 8 日。

（２）（口頭発表）「「運動会」の展開に関する素描」成功大学（台湾）主催国際シンポジウム　近代東亜體育世界與身體：臺日體育交流 2019 年 8 月 5 日。

（３）（論文）資料紹介〈翻刻〉「『高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌』―植民地期台湾の教育史―」　『国 立歴史民俗博物館研究報告』　2020 年 3 月。

（４）（論文）台南市新化区の学校史からみる台湾の御真影　『国立歴史民俗博物館研究報告』219 号、2020 年 3 月。

■2020 年度

（１）口頭発表

「意図した断絶と意図せざる継承について―1945 年の台湾と朝鮮における学校文書から」（京都大学教育学研究科 2020 レクチャーシリーズ 第 2 回 公開特別講演、2020 年 8 月 28 日）

学校文書形式の 1945 年以降 の台湾や朝鮮半島での継続性について検討した。
（２）口頭発表「韓国併合直後の公立普通学校 ―『草渓公立普通学校沿革誌』を手がかりとして―」（教育史学会第 64 回大会、2020 年 9 月 27 日）
朝鮮半島南部の山村の普通学校と地域の伝統教育機関（書堂）の関係について、ジェンダーや地域の識字に着目しつつ一定の知見を公表することができた。
（３）論考「（遺跡を訪ねて）八重山島蔵元跡から」（『學士會会報』947 号）
琉球以来の会所による漢籍教育と、新式学校による教育とのはざまで起こるさまざまな相克の事態に、多少なりとも迫ることができた。
■2021 年度
（１）「帝国日本の身体髪膚」（国際シンポジウム）「近代東亜体育世界與身体」（台湾成功大学、オンライン開催）、2021 年 5 月 14 日。
植民地支配/被支配とはどのようなことを意味するのか、「身体髪膚」にこだわってアプローチを試みた。具体的には、中華文明の象徴的な存在である結髪から近代化にともなう断髪への変容、加えて、伝染病への対策として西洋の医療衛生思想の導入にともなう入浴習慣の事例を紹介し，非支配層からも断髪や日本式 入浴の導入を受容する人びとが現れること，それは概ね男性から始まること，日本ではなく「文明」への捷径とみなされたことを報告した。
（２）「「誓わせる教育」の展開について―通過点・転換点としての「皇国臣民ノ誓詞」―」教育史フォーラム・京都（オンライン開催）、2022 年 3 月 7 日。
植民地統治末期の朝鮮で実施された「皇国臣民の誓詞」の背景にどのような歴史があったのか検討した。「学校文化」としてこんにちも当たり前のように行われる「誓い」の一つとして「皇国臣民の誓詞」も存在したと推定し，その始まりは，1920 年代日本の労働運動にあるのではないかと仮説的に結論付けた。
■2022 年度（延長年度）
（１）口頭発表
「植民地期朝鮮における一地方の初等後教育実態 ―「載寧商業学校」生徒の日記を読む― 」
歴博基盤共同研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」研究会 2022 年 9 月 15 日
植民地期（1930 年代）の中等教育に入学した朝鮮人男子生徒の日記の分析を行った。
（２）口頭発表
「「帝国日本」の学校儀式 」
京都大学人文研アカデミーシンポジウム 2023 年 2 月 11 日
近代天皇制のもとでの学校行事の検討を通じ、戦後に意図せず残っている継続性の問題を指摘した。
（３）口頭発表
「「君」をことほぐための模索－万歳か唱歌か(先島諸島の学校誌から)「」
青森中央学院大学共通研究費成果報告会 2023 年 3 月 21 日
明治期学校儀式の確立期から昭和初期まで、先島諸島の学校記念誌の分析を通じて、学校儀式でどのような唱歌がどういう場合に歌われたのかを考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 樋浦郷子	４．巻 16
２．論文標題 （研究ノート）韓国併合直後の公立普通学校－「草渓公立普通学校沿革誌」を手がかりとしてー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育史フォーラム	６．最初と最後の頁 85,98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 樋浦郷子	４．巻 81(1)
２．論文標題 書評「「江戸しぐさ」の現在と未来－原田実氏著作を読んで－」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史苑	６．最初と最後の頁 59,64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樋浦郷子	４．巻 947
２．論文標題 （遺跡を訪ねて）八重山島蔵元跡から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 學士會会報	６．最初と最後の頁 110,116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 樋浦郷子	４．巻 1001
２．論文標題 書評 広瀬玲子『帝国に生きた少女たち：京城第一公立高等女学校生の植民地経験』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 53,56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 樋浦郷子	4．巻 219
2．論文標題 台南市新化区の学校史からみる台湾の御真影	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 1,20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 樋浦郷子	4．巻 17
2．論文標題 從臺南市新化區的學校史觀察臺灣的 [御真影]	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史臺灣	6．最初と最後の頁 33,58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 樋浦郷子	4．巻 219
2．論文標題 資料紹介〈翻刻〉『高雄第一公学校（旗津国民小学）沿革誌』―植民地期台湾の教育史―」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 365,412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 樋浦郷子	4．巻 833
2．論文標題 書評 金誠著『近代日本・朝鮮とスポーツ 支配と抵抗、そして協力へ』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 89,93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 樋浦郷子
2．発表標題 帝国日本の身体髪膚
3．学会等名 近代東亜体育世界與身体（オンライン開催）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 樋浦郷子
2．発表標題 「誓わせる教育」の展開について―通過点・転換点としての「皇国臣民ノ誓詞」―
3．学会等名 教育史フォーラム・京都（オンライン開催）
4．発表年 2022年

1．発表者名 樋浦郷子
2．発表標題 韓国併合直後の公立普通学校 ―『草渓公立普通学校沿革誌』を手がかりとして―
3．学会等名 教育史学会第64回大会（オンライン開催）
4．発表年 2020年

1．発表者名 樋浦郷子
2．発表標題 意図した断絶と意図せざる継承について―1945年の台湾と朝鮮における学校文書から
3．学会等名 京都大学 グローバル教育展開オフィス2020レクチャーシリーズ 第2回 公開特別講演（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 HIURA Satoko
２．発表標題 Controversy on Okinawa in Making Exhibition Room of Modern and Contemporary History in National Museum of Japanese History
３．学会等名 Museum in the midst of controversy: What is "Contemporary"?（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 樋浦郷子
２．発表標題 帝国日本の『学校沿革誌』―学校の儀礼に着目して―
３．学会等名 日本台湾学会第21回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 樋浦郷子
２．発表標題 「運動会」の展開に関する素描
３．学会等名 近代東亜體育世界與身體：臺日體育交流（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 樋浦郷子
２．発表標題 教育勅語の展示をめぐって
３．学会等名 教育史学会第63回大会コロキウム
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 国立歴史民俗博物館・花王株式会社	4．発行年 2022年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 211
3．書名 〈洗う〉文化史―「きれい」とはなにか―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関